

平成31年度

前期日程

中国語問題

【注意】

1. 問題冊子及び解答用紙は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
2. 受験番号は、各解答用紙の受験番号欄に正確に記入すること。
3. 問題冊子のページ数は、表紙を除き5ページである。ただし、最初のページは白紙である。脱落している場合は直ちに申し出ること。
4. 解答用紙は表紙を含めて5枚である。
5. 解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。枠からはみ出してはいけない。
6. 問題冊子の余白は、適宜下書きに使用してよい。
7. 解答用紙は持ち帰ってはいけない。
8. 問題冊子は持ち帰ること。

I. 次の文章を読んで、下の問に答えなさい。

一九五六年十月三日晨

亲爱的孩子，你回来了，又走了；许多新的工作，新的忙碌，①xīn de biànhuà等着你，你是不会②gǎndào jì mò的；我们却是静下来，慢慢地回复我们③dāndiào de shēnghuó，和才过去的欢会与忙乱对比之下，不免④yípiàn kōngxū，——昨儿整整一天⑤ruò yǒu suǒ shī。A 孩子，你一天天的在进步，在发展；这两年来你对人生和艺术的理解又跨了一大步，我愈来愈爱你了，除了因为你是我们身上的血肉所化出来的而爱你以外，还因为你有如此焕发的才华而爱你；正因为我爱一切的才华，爱一切的艺术品，所以我也把你当作一般的才华（离开骨肉关系），当做一件珍贵的艺术品而爱你。 B 你得千万爱护自己，爱护我们所珍视的艺术品！遇到任何一件出入重大的事，你得想到我们——连你自己在内——对艺术的爱！不是说你应当时时刻刻想到自己了不起，而是说你应当从客观的角度重视自己；你的将来对中国音乐的前途有那么重大的关系，你每走一步，无形中都对整个民族艺术的发展有影响，所以你更应当战战兢兢，郑重其事！随时随地要准备牺牲目前的感情，为了更大的感情——对艺术对祖国的感情。你用在理解乐曲方面的理智，希望能普遍的应用到一切方面，特别是用在个人的感情方面。我的园丁工作已经做了一大半，还有一大半要你自己来做的了。爸爸已经进入人生的秋季，许多地方都要逐渐落在你们年轻人的后面，能够帮你的忙将要越来越减少；一切要靠你自己努力，靠你自己警惕，自己鞭策。你说到技巧要理论与实践结合，但愿你能把这句话用在人生的实践上去；那么你这朵花一定能开得更美，更丰满，更有力，更长久！

谈了一个多月的话，好像只跟你谈了一个开场白。我跟你是永远谈不完的，正如一个人对自己的独白是终身不会完的。你跟我两人的思想和感情，不正是我自己的思想和感情吗？清清楚楚的，我跟你的讨论与争辩，常常就是我跟自己的讨论与争辩。父子之间能有这种境界，也是人生莫大的幸福。C 除了外界的原因没有能使你把假期过得像个假期以外，连我给你一些小小的不愉快，破坏了你回家前的对家庭的期望。我心中始终对你抱着歉意。但愿你这次给我的教育（就是说从和你相处而反映出我的缺点）能对我今后发生作用，把我自己继续改造。尽管人生那么无情，我们本人还是应当把自己尽量改好，少给人一些痛苦，多给人一些快乐。说来说去，我仍抱着“宁天下人负我，毋我负天下人”的心愿。我相信你也是这样的。

（出典：傅雷《傅雷家书》（《最美的散文：中国卷》北京出版社 2007））

(1) 下線部 A～C を日本語に訳しなさい。

(2) 文中においてピンインで記された語句①～⑤を簡体字表記にし、それぞれの意味を日本語で書きなさい。

(3) 文中から抜き出した語句（出題文二重下線、20 箇所）の発音をピンインで記しなさい。

Ⅱ. 以下の文章はある一冊の本の序文である。これを読んで下の問に答えなさい。

(この部分につきましては、著作権の関係により公開しません。)

(この部分につきましては、著作権の関係により公開しません。)

(出典：周有光《拾贝集》，世界图书出版北京公司，2011)

(1) 筆者が2つ挙げている、人生のうちで最も長く続いた事件(出来事)について、その内容を具体的に述べている部分を日本語に訳しなさい。

(2) 筆者が述べている、人生のうちで最も幸運だった出来事とはなにか。また、その幸運はどのような経緯で得られたものか、具体的に答えなさい。

(3) 文中で述べられている占いについて、言われた通りになったか否か。またその結果に対して著者はどのように考えているかを答えなさい。

(4) 筆者は科学技術についてどのような考えを持っているか。これについて具体的に述べている部分(一段落)を日本語に訳しなさい。

(5) 下線部(①、②)を日本語に訳しなさい。

Ⅲ. 下線部の日本語を中国語に訳しなさい。

①国民に高い人気を誇る日本のマラソン界にも、夜明け前の時代はあった。日本が初参加した1912年ストックホルム五輪にこぼれ話がある。マラソン代表に選ばれた選手が辞退を願い出た。「荷が重過ぎる」と。

②選手団長の嘉納治五郎は、意を尽くして翻意を促している。欧米との差を埋めるため、誰かが捨て石にならなければならない。「日本スポーツ界の黎明の鐘となれ」。この一言で世界と戦う腹を固めたのが、今年のNHK大河ドラマの主人公となる金栗四三である。

③レースでは炎暑に苦しみ、26キロ付近で意識を失った。棄権した金栗は「行方不明」の扱いとなり、現地では「消えたランナー」として語り継がれている。「人笑わば笑え。(中略)恥をすすぐために、粉骨砕身してマラソンの技を磨き、もって皇国の威をあげん」

レース翌日の日記にそう書き留めている(『金栗四三』佐山和夫著)。④肝をなめるような執着が、箱根駅伝を生んだ経緯は多くの方がご存じだろう。昨年、相次ぎマラソンの日本記録を更新した設楽悠太、大迫傑の両選手は、箱根路を跳躍台にしたランナーである。

⑤どんな分野であれ、世界と渡り合う前段には数多の挑戦がある。死屍累々と築かれた敗北の山があり、それを乗り越えた先にしか夜明けはない。金栗が残そうとしたのは、記録ではなく、捨て石を恐れぬ意気に貫かれた「人」だろう。その足跡に教わることは多い。

「行方不明」の55年後、金栗はストックホルムでの記念行事に招かれゴールテープを切っている。記録は「54年8カ月6日5時間32分20秒3」。ゴール後の所感が伝わる。「長い道のりでした。この間に・・・6人の子供と10人の孫に恵まれました」。公私に「人」を残した人である。

(出典：「産経抄」『産経新聞』2019年1月6日)